

吉元昭治

著

(よしもと・しょうじ)
一九二八年東京生まれ順天堂大学医学部卒業。医学博士。日本道教学会会員、米国カリフォルニア州鍼灸師、ドイツ鍼灸学会会員、中港中医師公会名誉会長、吉元医院院長。医学の観點から、道教や不老長寿思想、神仙思想などを水年にわたり研究している。著書に『日本全国神話伝説の旅』(勉誠出版)、『老庄とその周辺』(谷口書店)、『日本の神話・伝説を歩く』(勉誠出版)、『死生学』(医道の日本)などがある。

図説、道教医学 東洋思想の淵源を学ぶ

本体五〇〇〇円(+税)
 A4判上製・函入クロス装
 クロス装・五一二頁
 二〇一八年九月刊行
 ISBN978-4-585-24009-9 C3047

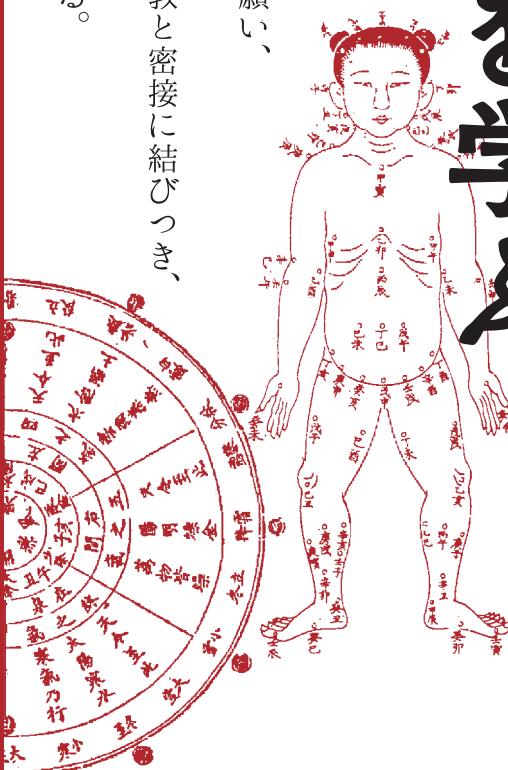
東洋において「生」「老」「病」「死」は
どのように理解されてきたのか――
洋の東西を問わず、人びとは生老病死の苦しみの克服を願い、
そして、そこに医学の発達をみた。
東洋における文明の発祥地・中国においては、医学は道教と密接に結びつき、
その淵源には道家を中心とした自然観があつた。
多様な中国古典文献から、深淵なる医学的思想を解説する。

○本書の特色

- 中国医学の原典ともいえる道教經典の一大叢書「道藏」をはじめ、多様な中国の古典文献を涉獵、その医学的思
想の諸相を抽出し、二〇〇点を超える豊富な図表とともに
に解説。
- 東洋医学の研究と実践をライフケースとしてきた著者の
知見を満載した決定版エンサイクロペディア。
- 巻末には利用の便を考え、索引を附した。
- 付録として「道藏」等中国医学関係經典索引を収載した。
道藏所収の医学関係項目検索に大きな一助となる。

○もくじ

本文篇	I 歴史と文明	II 自然観	III 平衡理論	IV 陰陽説
V 五行説	VI 易・干支	VII 諸子百家	VIII 古典類等の文献	
IX 道教と道教医学	X 「道藏」の医学的部分	XI 用語		
XII 道教医学を支える古典・經典	XIII 符・図・籤・呪			



参考メモ
附録 「道藏」等中国医学関係經典索引
掲載図表一覧／参考文献／あとがき／著作一覧／索引

書名

図説 道教医学
東洋思想の淵源を学ぶ

吉元昭治 [著]

ご送付先・備考欄

部数

本体50,000円(+税)
 A4判上製・函入クロス装・512頁
 2018年9月刊行
 ISBN978-4-585-24009-9 C3047

書店印

ご担当者様

勉誠出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-10-2 TEL=03-5215-9021 FAX=03-5215-9025

E-mail=info@bensei.jp URL=http://bensei.jp/

※ご記入いただいた個人情報は、ご注文書籍の発送、お支払い確認およびご希望いただいた方へ
刊行案内をお送りするために使用し、その目的以外での使用は致しません。

「本文篇」の理解を助ける図版 200点以上を掲載！

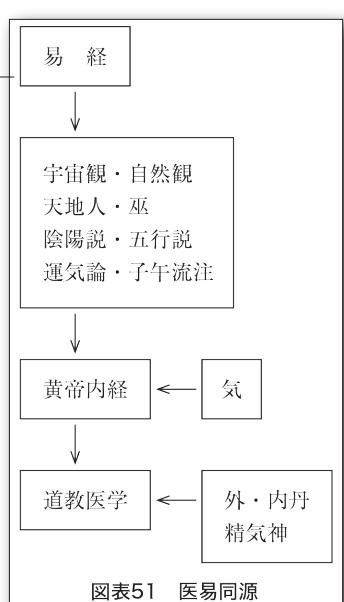
本文篇

VI-2. 医易同源

「医易同源」という語が示すように「易」と「医」との係わりはふかい。図(图表51 医易同源)のように、『易經』の底にある哲学・理論はまず「宇宙觀」「自然觀」という中国思想の基本から発し、天地人、三才の関係(八卦の3本の横すじは、それぞれ天地人を表現しているという)、両儀の(一)(--)(-)はそれぞれ陽と陰を現わし、五行説は十干・十二支と結び、運氣説のもととなる。また鍼灸でいう子午流注(子午の子は時刻で夜11時～1時、陽の初まり、午はひる11時～1時で陽の終り、陰が初まる頃をいう。つまり陰陽が交替する重要な時刻である。これと鍼灸の12経とを組み合せる。流注とは気血の巡りをいい、経絡の中の気血は時刻によって変化するという説で、ここにも天人相感、天人相応の思想を見出せる)なども『易經』の影響を受けている。

やがて『易經』の思想は、両漢時代までには『黃帝內經』に受けつがれていく。ここにははつきり『易經』には見られなかった「氣」の概念が導入され、中国医学の基礎の一つになる。この『黃帝內經』は道教が確立すると「道教医学」にもうけつがれ、ここに「外丹・内丹」の鍊丹術、「精氣神」の大きな要素が加わってくるようになる。

補完の意味で十干分類表(図表52)、人体と八卦(図表53)、八卦の主要な表象(図表44)をあげておく。十二支五行四季の関係はこれらによく示されている。



図表51 医易同源

VI-3. 運氣説

「五運六氣」ともいう。唐の王冰が『黃帝內經素問』を編纂する最終段に「天元紀大論第66篇」五運行大論第67篇、六微旨大論第68篇、氣交變大論第69篇、五常政大論第70、天元紀大論第71を追加編入した事による。これらを「運氣7篇」ともいう。

運気論は「易」から発し、「五運」は「木火土金水」を十干に配当(天干)、「六氣」は「風火(熱、君火)湿暑(相火)燥寒」を十二支に配当(地支)したことをいう。こうして年月日をわり出し、一年のいろいろな世間の出来事、豊作凶作、流行病、気候、災害等を占うもので、運気説には主運・客運・司天・在泉・客主などがある。王冰が『素問』に運気説を導入したことから、盛んとなる。王冰には他に『素問玄珠密語』がある。北宋の劉溫舒の『素問入式運氣論奥』、金の劉感素の『素問玄機原病式』が、また、同じ頃の張從正などいわゆる「金元四大家」も運気論の著述がある。中でも宋政和年間、曹孝忠編の『聖濟總錄』では図(図表54)のように卷初第一が「運氣」になっている。しかし時代と共に「運気論」は、理論の組み立てに深く入り、理解し難い面が出て来て、実際の医学から遊離して次第に減退してくる。

艮 (☶)	離 (☲)
手	目
心	腎
呼	吸
元神	元精 元氣

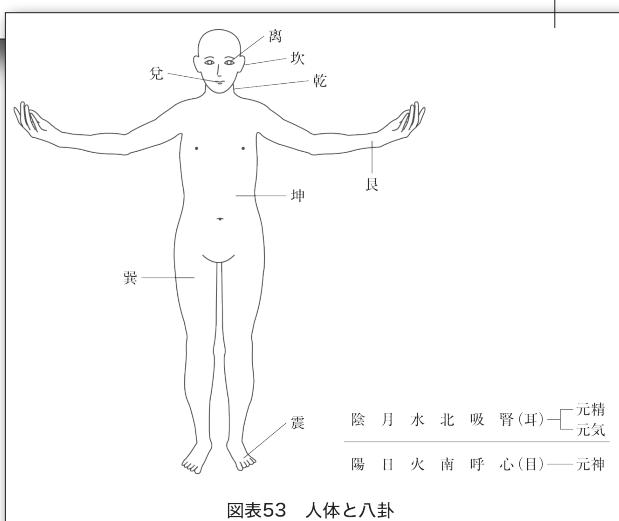
図表44 八卦の主要な表象

VI-4. この章のまとめ

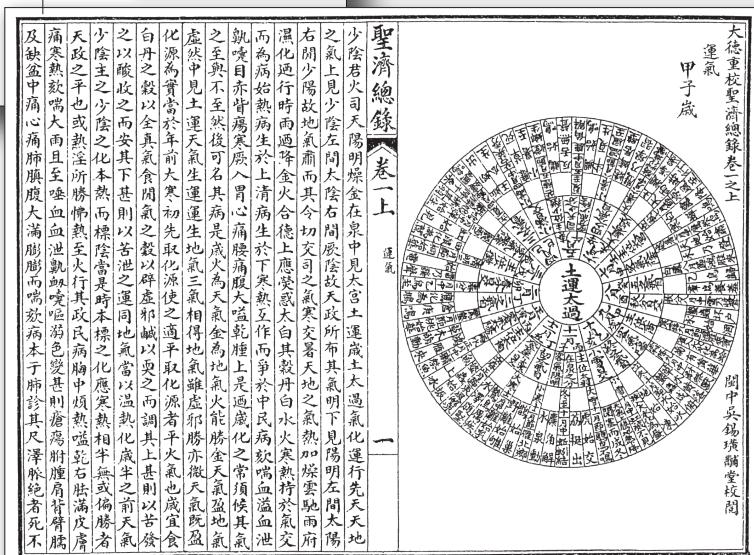
「易」は古い時代、あらゆる面に浸透し、国や社会まで動かすことになるが、人の占いをする程度のものになっていく。「易」のあの宏大な宇宙観や自然観は、いには占い師の手におち、星相術、人相術、手相術の方面にのみ残されていく。

十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
陰陽	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰
五行		木		火		土		金		水
五方		東		南		中		西		北
五季		春		夏		長夏		秋		冬
五臟		肝		心		脾		肺		腎

図表52 十干分類表



図表53 人体と八卦



図表54 『聖濟総録』卷一、運氣論(北宋、政和年間(1111~1117年))